

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

『美しき水車小屋の娘』 (Die schone Mullerin)のもう一つの顔

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2006-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/846

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『美しき水車小屋の娘』(Die schöne Müllerin) のもう一つの顔

渡辺 国彦

マックス・ミュラー (Friedrich Max Müller 1823-1900) は、著名なサンスクリット語学者としてイギリスを中心に活躍し、比較言語学や宗教学および神話学において多大な功績をあげたことで我が国でもその名が知られている。マックス・ミュラーはまた、詩人ヴィルヘルム・ミュラー (Wilhelm Müller 1794-1827) のひとり息子でもあった。マックスは、ペータース版 (旧版) の『シューベルト歌曲集第1巻』のために1885年に序文を書いた。この巻には、父ヴィルヘルム・ミュラーの詩による歌曲集『美しき水車小屋の娘』(Die schöne Müllerin) と『冬の旅』(Winterreise)が含まれているからだ。マックスは、この序文で2つの主旨に要約できることを主張しているのだが、そのいずれにおいても議論すべき問題が見いだされるのではないだろうか。

マックスは、まず始めに、詩と音楽つまり詩人と歌い手が昔は同一のものであり、そのような幸福な時代にあっては、ふたつに分けることができないものであったと述べている。しかし、時代は推移して、最高の芸術の創作においては分業が支配的になってしまった。その時、ミュラーの詩とシューベルトの音楽が互いに求め合い理解し合いふたつの魂がひとつになったという。さらに『美しき水車小屋の娘』と『冬の旅』をシューベルトの旋律なしで理解することは、シューベルトのリートを言葉なしで歌うことと同じ位ほとんど難しいように思われます。すべてが真の民謡のように、ヴィルヘルム・ミュラーの詩は音楽を求め、詩に欠けているものをおそらく今世紀の詩作にはほとんどないほど十分にシューベルトの音楽の中に見出しました。¹と述べている。

マックスの文は、父ヴィルヘルム・ミュラーの詩が、シューベルトの音楽と対等の価値を持っていることを主張しているようでありながら、現在でも一般に広く流布している見解をマックス自身が強く意識していることを感じさせてしまうのではないだろうか。いうまでもなく、シューベルトが不幸にもこれらの詩に音楽を与えてくれなかったら、これらの詩がどれほど多くの人に愛されつづけられることが可能だったかという見解である。このことは、ミュラーの詩それ自体に対する評価にも関わることでもある。

マックスが2番目に述べていることは、これからここで論じようとすることとさらに深く関連する。『美しき水車小屋の娘』の詩は、ささいな田園風景のなかでのささいな出来事を描写

1 Vorrede: In: Gesänge für eine Singstimme mit Klavierbegleitung. Nach den ersten Drucken revidiert von Max Friedländer. Band 1. New York. (Peters) o.J.

しているにすぎないのだが、そのことのなかにこの詩の魅力があるというのである。

「他のものには見えず、口を聞かない自然は語るこののできないものを見つけ、ことばで表現する詩人の目と詩人の精神をとおして、いたるところで活気付けられ、靈感を吹き込まれているのです。美をささいなことにおいて認識すること、非常に小さなことの中で大きなことを認識すること、日常のことにおいて素晴らしいことを認識すること、そう、この世のどのような楽しみにおいても神々しさを予感すること、このことはヴィルヘルム・ミュラーの小さなリートにその独自の魅力を与えるものであり、それらのリートは、生活の慌しい動きの中で自らを静かに自然に委ねることの歓喜を忘れず、美しいこと、良いことそして真実における神々しい偏在の神秘への信仰を失ってしまわなかった人すべてに愛好されていました。」²

これらの詩の中には、人々の興味を引く犯罪や歴史的な事件が描かれてはいない、おだやかな田園風景のなかで語られる小市民の失恋の物語にすぎない。社会的な出来事とはおよそ隔絶した、閉ざされた小さな世界で話は繰り広げられる。最後は主人公の自殺で終わるにしても、ひとりの個人の心の内面とそれにこたえるおだやかな自然のなかでの牧歌劇。これが『美しき水車小屋の娘』の読者に感銘をあたえる本質だという。これもまた、一般に広く流布している見解を代表した考えであろう。たしかに、『美しき水車小屋の娘』には、ドイツロマン派の香りが漂っている。放浪のモチーフがあり、森や角笛にもことかかない。水の精もでてくる。これに子どもの死のモチーフでも加われば、19世紀の境を越えて20世紀にまで達するドイツロマン派の小道具は、あらかたそろいそうだ。これらのモチーフを素朴に扱ったおびただし数の文学作品とそれに基づいた音楽作品も存在している。³ マックスによれば、『美しき水車小屋の娘』もこのような民衆的で素朴な姿をまとった作品の系譜のなかに分類されることになる。

マックスの序文は、早すぎる死のためにほとんど記憶にない父親への愛情に満ちたすぐれたものだが、その『美しき水車小屋の娘』に対する見解には、これからすこし異議を唱えたい気がするのだ。もちろん、ミュラーの『美しき水車小屋の娘』が、その叙情詩における詩的表現力において優れていることや水車小屋の若者と自然（特に小川）との交流においてユートピア的な空間が生み出されていることを否定するわけではない。しかしヴィルヘルム・ミュラーの作品の本当の姿を知るには、いうまでもないがこの作品が、本来シューベルトの作曲とは独立した作品であるという原点に戻らなければならない。シューベルトの作曲はこの作品の魅力を最大限引き出しているのだが、卓越した音楽の力のために逆に本当の姿が見えなくなってし

2 Ebd. Vorrede.

3 たとえば、歌曲で言えば、ベルリンの作曲家 Karl Friedrich Curschmann (1805-1841) の Graf A. von Schlippenbach (1800-1886) の詩に基づく “Waldesgruß” などは、打ち解けた気分させる森のなかでの素朴な感情を表現している。Gustav Mahler は、1884年から1904年にかけて、『さすらう若人の歌』、『少年の魔法の角笛』、『亡き子をしのぶ歌』などをこれらのモチーフによって作曲している。

まっている可能性もあるからだ。

『美しき水車小屋の娘』は、1816年の秋にプロイセン顧問官で愛国詩人シュテージェマン (Friedrich August von Stägemann 1763-1840) の家での余興の歌と劇がもとになっている。シュテージェマンの家では、16歳の娘 (Hedwig) を中心に文学的サークルが開かれていて、後に作曲家メンデルスゾーンの姉ファニー (Fanny Mendelssohn) と結婚したヴィルヘルム・ヘンゼル (Wilhelm Hensel 1794-1861) と妹のルイーゼ (Luise) がミュラーを誘ったのであった。この音楽劇は当時流行していたパイジェッロ (Paisiello) のオペラ『水車小屋の娘』 (La molinara, ossia, L'amor contrastato) (Christoph Friedrich Bretzner のドイツ語版 “Die schöne Müllerin” も存在する。) やゲーテの物語詩 (Romanze) “Der Edelknabe und die Müllerin”, “Der Junggesell und der Mühlbach”, “Der Müllerin Verrat”, “Der Müllerin Reue” などに影響を受けて、そこでおこなわれる集まりの余興としておこなわれた。この時の音楽劇の内容はパイジェッロのオペラとゲーテの詩を適当に混ぜ合わせ若干の変更を加えたようなもので、いろいろな男に求婚された水車小屋の娘が最後には獵師を選び、粉ひき職人の若者が自殺する筋書きである。演じるだけでなく、作詞もみなで分担してなされた。作曲はベルガー (Ludwig Berger 1777-1839) が担当した。10曲のうち5曲の詩をミュラーが受け持ち、後に “Wohin?”, “Des Müllers Blumen”, “Die böse Farbe”, “Trockne Blumen”, “Des Baches Wiegenlied” になる詩の原型がこのとき作られた。

1817年から1820年の間にミュラーは、“Frauentaschenbuch für das Jahr 1818”, “Gaben der Milde”, “Gesellschafter”, “Frauentaschenbuch für das Jahr 1821” という雑誌にこれらの5つの詩に手を加えたものや、新たにこのチクルス『美しき水車小屋の娘』に属することになる詩を発表した。登場人物は小川をのぞけば水車小屋の若者ひとりのモノドラマの形をとることになる。1820年にデッサウのアッカーマン社 (Georg Christian Ackermann) より『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩⁴ (Die Sieben und siebenzig Gedichte aus den hinterlassenen Papieren eines reisenden Waidhornisten 詩集の日付は1821年) が出版される。この様々な詩を含む詩集の冒頭に『美しき水車小屋の娘』が完成されたチクルスとして置かれることになった。

『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』つまり『旅する森の角笛吹き』の遺稿からの詩集第1巻』に掲載された25の詩からなるチクルス『美しき水車小屋の娘』のなかで、『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』で初めて出版されたのは、“Der Dichter, als Prolog”, “Halt!”, “Danksagung an den Bach”, “Das Mühlenleben”, “Morgengruß”, “Pause”, “Blümlein Vergissmein” (「忘れな草」ではなく「忘れ草」), “Der Dichter, als Epilog” の8つである。つま

4 続いて1824年に『冬の旅』を含む『旅する森の角笛吹き』の遺稿からの詩集 第2巻』が作曲家ウェーバー (Carl Maria von Weber 1786-1826) に献呈されて同じデッサウの Georg Christian Ackermann 社より出版された。『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』も1826年にいくつかの詩が加えられて改訂されたため「77の詩」の記述は標題から消えた。

り、これ以外の詩は『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』の中でチクルスとして完成される以前に既に何度か出版されていたことになる。

シューベルトは、ミュラーの『美しき水車小屋の娘』の25の全ての詩に曲を付けたわけではない。シューベルトが『美しき水車小屋の娘』の作曲にあたっては、『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』をテキストにしていたのは、明らかである。たとえば、作曲された“Mein”の歌詞を比較しても、以前に出版されていた稿ではなく『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』における稿にしたがっているのがわかる。したがって、シューベルトは、知らなかったのではなく意識的にいくつかの詩を除外したことになる。シューベルトが、作曲しなかったのは、“Der Dichter als Prolog”, “Das Mühlenleben”, “Erster Schmerz, letzter Scherz”, “Blümlein Vergissmein”, “Der Dichter, als Epilog”の5つの詩である。さきに挙げた詩と重複する詩が多いことに気づく。除外した5つの詩のうち実に4つは、ミュラーが『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』において、初めて付け加えた詩である。

シューベルトは、シューバルト (Christian Friedrich Daniel Schubart 1739-1791) の『鱒』(die Forelle) の作曲にあたっては、オリジナルの詩にある最後の若い女性への教訓の形をとったカモフラージュの節を省くことによって為政者の機嫌をそこね10年間投獄された作家の意図をより忠実に表現したが、ここでシューベルトは、ミュラーが新たに付け加えた詩の多くを作曲しないことによって、このチクルスのある一つの面を目立たなくさせ叙情的な面を強調することとなった。

声楽家のフィッシャー＝ディースカウは、シューベルトの『美しき水車小屋の娘』の録音でシューベルトが省いた部分をナレーターとして復活させる試みに参加している。それにもかかわらず、個人的にはこのような試みに賛成できないと表明していることも、『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』に掲載されたミュラーの『美しき水車小屋の娘』とシューベルトのこの詩に基づいた作品に無視できない相違があまりにも大きいためであろう。もちろん、個々の詩におけるシューベルトの解釈が、全面的にミュラーの意図に反しているという意味ではないが、シューベルトが意図的に省いた詩つまりミュラーが『旅する森の角笛吹き』の遺稿から77の詩』で付け加えた詩の多くがこのミュラー自身が意図したチクルス全体の方向性の決定に大きく関わっているのである。とりわけ、「詩人、プロローグとして」(Der Dichter, als Prolog), 「水車屋職人の生活」(Das Mühlenleben), 「詩人、エピローグとして」(Der Dichter, als Epilog)の3つは、常識的な感覚では、牧歌的な恋愛の物語にはふさわしい詩ではない。たとえば、「詩人、プロローグとして」には次のように書かれている。

Ich lad euch, schöne Damen, kluge Herrn,

Und die ihr hört und schaut was Gutes gern,

私があなたがたをご招待いたしましょう。美しいご婦人方ならびに賢明な殿方の皆さん、よいものを聞いたり見たりするのが好きみなさま、

Zu einem funkelnagelneuen Spiel
Im allerfunkelnagelneusten Stil;⁵

ピカピカの
最新のスタイルの芝居へ

『美しき水車小屋の娘』としてまとめられている詩が、保留無しに「最新のスタイル」のものであるといえないことは、この時代の読者であれば、明らかであろう。既に述べたように、「最新のスタイル」というにしては、当時パイジェットのオペラはあまりにも有名だった。その流行に合わせて何人もの作曲家がオペラのなかの aria から変奏曲を作っているほどである。小川と若者が会話をするという設定もゲーテの詩からの影響が顕著である。そもそも、ベルリン時代におこなった音楽劇もこれらの流行のパロディーとしての余興なのだから。『旅する森の角笛吹き』の遺稿から 77 の詩』のタイトルも、〈森〉〈角笛〉（狩人のホルンや郵便馬車のホルン）〈遍歴〉〈放浪〉などアルニム、ブレンターノ、ティークなどに代表されるドイツロマン主義文学に使い古されていた題材からとっているのは明らかだ。⁶「そして月も雲のベールから／憂鬱に、流行が欲するように、覗き見しています。」⁷（Und auch der Mond blickt aus der Wolken Flor / Schwermütig, wie's die Mode will, hervor.）の表現などを読むとロマン派の詩に多く使われる「月」に関する表現を意識的に陳腐に使ってさえいるような印象をあたえる。「水車屋職人の生活」（Das Mühlenleben）、では、「ハエよけ網を編む」という詩にはふさわしくない表現が出現する。

(…)

Wenn sie Fliegennetze strickt,

あの娘がハエよけ網を編んでいるとき、

(…)

Und verständig lobt den einen,

そして賢くも（あの娘は）誰かをほめる、

Daß der andre merken mag,

他の誰かが気づくように、

Wie er's besser treiben solle,

もっと努力しなければならいかを、

Geht er ihrem Danke nach - //

もし自分があの娘の感謝を追い求めるなら—

Keiner fühlt sich recht getroffen,

だれも射抜かれたとは感じない、

Und doch schießt sie nimmer fehl,

でもあの娘は決して的をはずさない、

Jeder muß von Schonung sagen,

だれもが、禁猟区（思いやり）について話さ

5 »Wilhelm Müller Werke« Fünf Bände Herausgegeben von MARIA-VERENA LEISTNER Mit einer Einleitung von BERND LEISTNER. Verlag Mathias Gatzka. Berlin, 1994. (以下 WMW.) Bd.1, S.41.

6 »Die Sieben und siebenzig Gedichte aus den hinterlassenen Papieren eines reisenden Waidhornisten« の「遺稿から」(aus den hinterlassenen Papieren) の部分の表現でさえベルリンでの学生時代に読んだ学生歌集 »Aus den hinterlassenen Papieren eines unglücklichen Philosophen Florido genannt, gesammelt und verbessert von C.W.K.« から取ったと言われている。WMW. Bd.1, S.282.

7 WMW. Bd.1, S.41.

Und doch hat sie keinen Hehl. //

Keiner wünscht, sie möchte gehen,

Steht sie auch als Herrin da,

Und fast wie das Auge Gottes

Ist ihr Bild uns immer nah. -⁸

なければならぬが、

でもあの娘は隠してはおかない。

だれもあの娘にいなくなって欲しいとは望まない、

たとえ女主人としてあの娘がそこにいても、

そしてほとんど神の目のように

あの娘の姿はいつも僕たちの近くにある。

ベルリン時代のルイーゼ・ヘンゼルとの苦い思い出が紛れ込んだかのような詩である。ルイーゼ・ヘンゼルは、ベルリンのサークルでは人気があり、ミュラーも彼女の中に「純潔なキリスト教一ドイツ的乙女の理想像」⁹を見いだして思いを寄せていた。ブレンターノ (Clemens Brentano 1778-1842) が恋敵として出現してからは、あきらめるしかなかった。彼女がミュラーに対してどれほど、恋愛感情を持っていたかは分からない。しかし、彼女を理想化していたミュラーにとっては、裏切られたと思ったかもしれない。このような背景がこの詩に反映されているにしても、「僕は知りたい」 (Der Neugierige) と「いらだち」 (Ungeduld) の間におかれている詩としては、すこし皮肉が効きすぎてはいまいか。プロローグとエピローグをのぞくと、モノドラマとして主観的に物語を語る水車小屋の若者と小川しか登場しないはずが、娘に惚れ込んで冷静さを失った若者の判断ではなく、作者としてのミュラーの冷静な視点が、この詩には入り込んでいる。さらに最後の「詩人、エピローグとして」で、作品への皮肉で客観的な距離をさらに強調する。

(…)

Aus solchem hohlen Wasserorgelschall
Zieht jeder selbst sich besser die Moral;

Ich geb es auf, und lasse diesen Zwist,

Weil Widerspruch nicht meines Amtes ist. //

(…)

So hab ich denn nichts lieber hier zu tun,

このよううつろな水オルガンの響きからは誰も自分がモラルをひきだすほうがいいですよ。

私はそれを放棄して、この反目を放っておきましょう。

矛盾は私の関知するところではありませんから。

それで私はみなさまに最後におやすみを言う以外は、

8 WMV. Bd.1, S.47f.

9 WMV. Bd.1, S.XVII, Einleitung von Bernd Leistner.

Als euch zum Schluß zu wünschen, wohl zu ruhn.

Wir blasen unsre Sonn und Sternlein aus -
Nun findet euch im Dunkel gut nach Haus,
Und wollt ihr träumen einen leichten Traum,
So denkt an Mühlenrad und Wasserschaum,¹⁰
(…)

ここでは何もすることがありません。

私たちは太陽と星を吹き消しましょうー
暗闇の中、気をつけてお帰りください、
みなさまがちょっとした夢を見たければ、
水車と水の泡を思ってください。

うつろな水オルガンの響きから引き出すモラルとは、どのようなモラルなのだろうか。上手に世の中を生きている観衆への皮肉なのか。太陽と星を吹き消すことによってこの物語が人工の作りものだと思われながら、最後に「おやすみ」と言うことによって、夢を見ることにふれる。『冬の旅』や『ギリシャ人の歌』において一般大衆を眠りをむさぼる者として嘲笑するように、『美しき水車小屋の娘』の読者に対してもからかいの態度をみせる。いずれにせよ、『旅する森の角笛吹き遣稿から 77 の詩』で『美しき水車小屋の娘』はベルリン時代のパロディーとしての皮肉さとは比較にならぬほど辛辣さを増したのである。その背景を検証するためには、ミュラーの置かれていた状況を知る必要があるだろう。

ヴィルヘルム・ミュラーは、1794年10月7日にデッサウで仕立屋親方¹¹の6番目の子として生まれた。全部で7人の子供のうち唯一成人に達することができたのはヴィルヘルムだけだった。父親は、自分とは違った道を息子にたどらせることにして、大学教育をうけさせた。1812年7月にベルリン大学に登録して古典文献学、ドイツ文学、近代英語などを学ぶ。おりしも、ナポレオンのロシア敗北の知らせが届くと、学生たちは先を争って学業を放棄し義勇兵(freiwilliger Jäger)として戦いに参加した。大学はこれを扇動する教師を含め愛国的空気に満ちあふれていた。ミュラーも例外ではなく義勇兵としていくつかの戦いに加わり、ブリュッセルで除隊になり、故郷のデッサウを経由してベルリンに戻り1815年1月から再び大学で勉強することになる。最初のベルリンにおける生活で既に知り合っていたヘンゼル家や『美しき水車小屋の娘』のもとになった劇の上演されたシュテーゲマン家のサロンに頻繁に出入りするようになったのもこの時期以降である。

ナポレオンに対する勝利と共に、社会情勢も変貌した。ナポレオンに対する勝利の後、ヨーロッパ列国の指導者たちは引き継いできた自分たちの利益を守るために一転して自由主義的思

10 WMV. Bd.1, S.64.

11 靴屋職人との記述された研究書もみうけられるがHatfieldによる以下の詩集の先駆的研究の記述に影響されたものと思われる。Hatfieldの勘違いであろう。»Gedichte: Vollständige kritische Ausgabe mit Einleitung und Anmerkungen« Edited by James Taft Hatfield. Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts, no. 187. Berlin: B. Behr, 1906. Reprinted in Deutsche Literaturdenkmale des 18. und 19. Jahrhunderts. Nendeln, Liechtenstein, and New York: Kraus Reprint, 1973, S.V.

想とナショナリズムの思想が邪魔になったのである。ナポレオンという異国勢力を追い出すのには役にたったナショナリズムは多くの小国家のなかに君臨し利益をむさぼる領主にとっては余計な思想である大ドイツ主義に通じ、自由主義的思想やそれに基づく議会の権利の拡大は、自分たちの地位を脅かすものであった。彼らは、〈ドイツ同盟〉や〈神聖同盟〉の枠の中で、旧来の専制的な支配体制を守ろうとした。

弾圧は、メテルニヒの主導のもとで1819年に出されたカールスバートの決議で決定的になるのだ。大学においては、学生同盟は弾圧を受け、出版も20 Bogen (A4に換算すると320頁)以下の書物の検閲の義務化。捜査、監視する特別委員会の設置などからなる反動的な政治である。なおカールスバートの決議は1848年の革命で廃止されるまで有効であった。

すでに、1816年1月にヴィルヘルム・ヘンゼルを含む仲間5人で出版した『盟約の花』(Bundesblüten)が検閲で問題となった。検閲官の機密枢密顧問官レンフナー(Heinrich Renfner)とのやりとりが、日記に残っている。

「彼(レンフナー)は、僕らがあまりにも自由について僕らの詩句の中で語っていると非難した。そして僕がレンフナーに王はそのために(自由のために)招集したのだと語ったとき、レンフナーは言った。ああ、あの頃はね！」¹²

ミュラーが書いた詩に2度「自由(Freiheit)」ということばが出てきたというのが問題となった理由だが、ナポレオンとの解放戦争の時にはもてはやされた言葉が、すでに支配者にとっては危険な言葉となっていた。これは、ミュラーが経験した初めての検閲であり、それ以後、検閲には多くの作家や歌曲およびオペラや合唱曲を作った作曲家同様に常に苦しめられることになる。それでも、まだ、ミュラーは、ドイツの心、ドイツ的な趣味、ドイツの騎士精神にこだわり、フランス人をけなし、ルイーゼの前に古い時代のドイツの服装をして現れたりしていたのだ。ところが、長いイタリアへの旅行から帰った後、ミュラーの態度には明らかな変化が見られるのだ。

ルイーゼとの間にも溝ができた後、1817年8月にプロイセンの侍従ザック男爵(Albert von Sack)の世話係として男爵の費用でイタリアに旅行する機会を得た。1818年に旅の途中でウィーンにおいてギリシャの亡命革命家たちと会い、影響を受ける。イタリアでは、男爵とは仲違いをして別れるが、様々な体験をして1819年にデッサウにもどる。イタリアに出発する前はゲーテのイタリアびいきを非難し、イタリアへ行く以前のゲーテの作風のみを評価していたミュラーだが、イタリアの自由な空気に触れ、今度はミュラー本人が自ら偏狭なドイツの国粹主義から解放されたと表明するのである。

12 WMV. Bd.5, S.63.

イタリアから帰った後 1819 年にデッサウで教職に就き、1820 年には内容的にも構成的にも最終的な改訂版である『美しき水車小屋の娘』を含む『旅する角笛吹きの遺稿から 77 の詩』を出版。1821 年 5 月にアーデルハイト・バーセドウ (Adelheid von Basedow 1800-1883) と結婚し幸せな結婚時代を過ごす。1821 年から 1824 年の間に一連の『ギリシャ人の歌』(Lieder der Griechen) を出版。1823 年に 2 人目の子としてマックスが誕生、ちなみにこの年にシューベルトが、『美しき水車小屋の娘』を作曲している。

ミュラーの他の作品に目を向けると、カールスバートの決議のもとで検閲はさらに強化され、うかつな発言は、よくて書き換えまたは出版停止、最悪の場合には逮捕、追放という危険が高まるなか、様々なかたちの偽装をほどこされて作品は出版されていった。

たとえば、1826 年の文芸誌『ウラーニア』(Urania) にのったミュラーの「鱒」(Die Forelle) は、

In der hellen Felsenwelle
Schwimmt die muntere Forelle,¹³

明るい岩の波間に
元気の良い鱒が泳いでいる、

で始まる詩だ。8 行 4 節からなる詩は、シューベルトも作曲したシューバルトの同名の詩と同じ長さである。シューバルトの詩を意識したものだということは想像に難くない。シューバルトの詩はご存じのように、

In einem Bächlein helle,
Da schoß in froher Eil
Die launige* Forelle
Vorüber wie ein Pfeil.¹⁴

明るい小川の中を、
軽やかに
上機嫌な鱒が
矢のように通り過ぎる。

で始まる。(*シューバルトの作曲では launische)

先に述べたように、シューバルトの詩は 1777 年から 10 年間の投獄生活の間に書いた詩である。音楽家で詩人でもあったシューバルトは、たびたびの権力者に対する批判から Württemberg の領主カール・オイゲン侯¹⁵ (Carl Eugen 1728-1793) の怒りをかい、その勢力のおよばない領土外のウルムに逃げていたが、オイゲン侯のめぐらした策略におびき出されて

13 WMV. Bd.2, S.50.

14 Die digital Bibliothek der deutschen Lyrik Zweitausendeins. 2004, S.66161.

15 豪華な宮廷生活を支えるため領民を外国に傭兵として売るなどの悪政で知られる。シューバルトには、船に乗せられアフリカに売られる傭兵を描いた「Kaplied (岬の歌)」などの詩がある。派遣された現地だけでなく輸送の途中でも劣悪な環境によって多くの死者が傭兵の中からでた。音楽家としては、鱒の自身による作曲や鍵盤楽器の演奏、“Ideen zu einer Ästhetik der Tonkuns” (Georg Olms Verlag AG, Hildesheim 2002, 3. Nachdruck der Ausgabe Wien 1806) などの音楽理論書で知られている。

不覚にも逮捕され投獄されてしまう。つまり、だまされて釣られた鱒は、シューバルト本人に他ならない。しかし、詩の真の意味がだれにでも簡単に分かっては、自分からさらに悲惨な運命を招くようなものだ。偽装は慎重にほどこさなければならない。

Und ich mit regem Blut
Sah die Betrogne an.¹⁶

そして僕は興奮して
だまされた魚をながめていた。

この光景を客観的にながめている自分が他に存在するようにして本来は自分である鱒との距離を意識的に作る。さらに、シューバルトは、娘たちに向けた教訓的な節を最後に付けた。「(…)娘さんたち、ごらんなさい／釣り針をもって誘惑する男たちを！－／さもないと血を流しても遅すぎますよ。」(… Mädchen, seht / Verführer mit der Angel! - / Sonst blutet ihr zu spät.)。これで、本来の詩の意味は鈍い者には気づかれないですむし、たとえそのような疑いをかけられても言い逃れができる。

当時のウィーンの反動政治に対して怒れる青年の一人であったシューバルトは¹⁷、教訓的な最後の節を省いて詩の作者の意図をより忠実に表現した。シューバルトがこの詩を書いた1780年代とシューバルトが作曲した1820年のウィーンでは言論の弾圧にたいしては共通するところがあったのだ。もちろんシューバルトの作曲は、この詩の叙情的な部分をもくまなく表現しているし、優れた詩や曲は、作者が本来意図した内容を一義的に伝えるだけでなくそれを越えて感動させてくれるのである。

一方、ミュラーは、最後の節を

Kleine muntere Forelle
Weile noch an dieser Stelle
Und sei meine Lehrerin!¹⁸

小さな元気な鱒よ
この場所にもうすこし留まれ
そして私の教師であれ

で始め、どのように障害を乗り越え、どんなときでも本領を発揮していけるのかを教えてくださいと鱒にたのむ。シューバルトの失敗は繰り返さないとの表明ともとれる。

また、ミュラーは、〈ギリシャ人ミュラー〉(Griechen-Müller)の名で呼ばれるほど、トルコ

16 Die digital Bibliothek der deutschen Lyrik Zweitausendeins. 2004, S. 66161.

17 シューバルトが、政治に無関心で日々友人との談笑や酒にふけていたというのは、何の根拠もない偏見であろう。シューバルト自身、検挙されたこともあり、友人たちの中には逮捕、追放された者もいる。また歌曲やオペラの作曲、出版に関して検閲には絶えず悩まされていた。集會が禁止されていた時代にあつて、居酒屋は意見を交換しフラストレーションを爆発させる格好の場所であつた。他の仮装の例としてたとえば、シューマンは、『ウィーンの謝肉祭のさわぎ』(Faschingsschwank aus Wien, 1840年出版)の第1曲目に、禁じられていたラ・マルセイエーズの旋律の一部を謝肉祭のさわぎのどさくさにまぎれて一瞬ではあるが響かせている。また謝肉祭は伝統的に皆が「道化」になり、普段言えない悪口などもある程度許された場でもある。

18 WMV. Bd.2, S.50.

に対するギリシャの解放戦争に題材をとった詩集『ギリシャ人の歌』シリーズを先に述べたように何度も出版している。読者にいささか飽きられ、その上表現の辛辣さが増して検閲との問題が出版に影響するようになるまでは、当時としては販売的に成功した出版物であった。古代ギリシャへの愛着や尊敬するバイロンに影響された詩もあるが、ヨーロッパ列国の権力者や無関心な市民を批判した詩も多い。たとえば、「新十字軍参加者」(Die neuen Kreuzfahrer)において、次のように詩句がある。

Der Herr des halben Mondes hat gestiftet einen Orden,

半分欠けた月の支配者が勲章を寄贈した,

Ein Kreuz für alle Christen, die ihm Christen helfen morden,¹⁹

キリスト教徒を殺すこの支配者を助ける全ての
キリスト教徒のための十字架を,

(…)

もちろん、「半分欠けた月の支配者」はギリシャの独立を阻害しギリシャ人を殺すオスマントルコで、殺される「キリスト教徒」はギリシャの民衆であり、殺害に手を貸す「キリスト教徒」は、ヨーロッパ列国の無関心な民衆や自分の利害しか考えない支配者たちである。

集団で集まることに多くの規制があった時代に合法的な社交の場でもあった男声合唱団のための歌「良きワイン、良きラテン語」(Guter Wein, gut Latein)には、

Leer ist meine Westentasche,

おれのチョッキのポケットはからっぽ,

Und der Wirth liebt baares Geld. — Schafft mir eine neue Flasche,

宿屋のオヤジは現金が好き。おれに新しいピ
ンをくれ,

Oder eine neue Welt!²⁰

あるいは新しい世界を!

と当時の重苦しい政治体制が崩壊した「新しい世界」への期待をさりげなくこのたわいのない酒礼賛の詩に潜り込ませる。この詩は、『冬の旅』と同じく『旅する角笛吹き遺稿からの詩集第2巻』に収められている。『旅する角笛吹き遺稿からの詩集第2巻』も第1巻と同様に政治的シャンソンから男声合唱のための歌や素朴な恋愛や放浪の歌にいたるまで様々な詩が掲載されているが、この詩のように検閲を巧みにのがれた風刺が隠されている詩も多く含まれている。『美しき水車小屋の娘』が収められている『旅する森の角笛吹きの遺稿から77の詩』からもう

19 Hatfield: a. a. O, S.216.

20 WMV. Bd.1, S.146.

ひとつこのような例として「アトリの別れ」を少し長くなるが引用する。なお、訳語は鑑賞のためではないので、美しさに留意するのではなく、できるだけ原文に忠実に努め、日本語として不自然でも行も原文とできるだけ対応させたのは、いままでと同様である。

Des Finken Abschied

アトリの別れ (アトリはスズメ科の小鳥の一種)

Es saß ein Fink auf grünem Zweig,
Der war so frisch und blätterreich,
Und sang wohl dies und jenes;
Durch Lenz und Sommer und Herbst er sang,

一羽のアトリが緑の枝に止まっている、
その枝は生き活きとして葉がたくさんあって、
(アトリは) あれやこれや楽しく歌っていた

Hätt da gesungen sein Lebelang,
Wär nicht der Winter kommen. //

春から夏、そして秋を通してアトリは歌った、
一生涯そこで歌っていただろうに、
もし冬がこなかったとしたら。

Der Winter kam mit Saus und Braus:
»Ihr Müßiggänger, zum Reich heraus,
Ihr Flattrer und Sänger und Horcher!

冬はざわめき荒れ狂いながらやってきた
「お前らなまけものたちよ、帝国へ出ておいで、
お前ら羽ばたくものたちよ、歌うものたちよ、
立ち聞きするものたちよ!

Herab vom Baum, du grünes Blatt!
Zum Bauen und zum Brennen hat
Der Herr das Holz erschaffen.« //

木から下りて来い、緑の葉よ!
建設のために、燃やすために
主はその木を作られたのだ。」

Da geht im Hain das Schütteln los,
Und flugs steht alles blank und bloß,
Bis auf den Zweig des Finken.
Jetzt, naseweises Vöglein, flieh!
Mit solcher Staatsökonomie
Da ist nicht viel zu spaßen. //

その時小さな森で震動が始まり、
すぐにすべてがむき出し裸になった、
アトリの枝の上まで。
今すぐ、生意気な小鳥よ、逃げろ!
このような国家経済で
ここではあまり楽しむことなんかできない。

Und's Vöglein flog und sang: »Ade!«
Da warf der Winter Reif und Schnee
Ihm hintendrein, und trafs nicht.
Der Finke lacht' aus voller Kehl:
»Bewahre Gott jede Christenseel

そして小鳥は飛び、歌った「さよなら!」と
そのとき冬が霜と雪を投げつけた
小鳥のあとから、でもそれは当たらなかった。
アトリは大声で笑った
「神がどのキリスト教徒の魂をも守ってくださ
ることを

Vor diesem Landesvater!« //

この君主から！」

Und als ich mal nach Welschland zog,
Manch Vöglein mit dem Wanderer flog,
Da war auch jenes drunter:
Und wär's gewest eine Nachtigall,
So hätt mein Lied einen bessern Schall,
Ich hab's ihm nachgesungen.²¹

私がかつてイタリアへ行った時、
たくさんの鳥たちが旅人と共に飛んでいた、
あの小鳥もその中にいた
それが一羽の小夜鳴き鳥だったら、
私の歌はもっとよい響きなのに、
私はあの小鳥にならって歌っていたのだ。

1822年にベルリンでこの詩が他の詩選集に入れられて出版されたときには、検閲の介入によって「国家経済」(Staatsökonomie)が「森の経済」(Forstökonomie)に、「この君主から！」(Vor diesem Landesvater!)が「この厳しい主人たちから」(Vor diesen strengen Herren!)に、そして「私がかつてイタリアへ行った時」(Und als ich mal nach Welschland zog,)が「私がかつて異郷に行ったとき」(Und als ich einmal in die Fremde zog,)と3カ所の変更を余儀なくされた。²² ラテンの国ヘドイツの小さな森からアトリを追い出す「冬」は、厳しい圧政の時代の象徴としての常套句であろうが、ミュラーにあっても例外ではない。Welschland(ラテン系の国)は、ミュラーの思想に転換をもたらしたイタリア旅行との関係からイタリアと訳したが、思想的にはフランスと訳してもそう大きな差はないだろう。「小夜鳴き鳥」の美しい歌を手本にするのではなく、不幸にして冬の時代の国から逃げてきた小鳥にならってイタリアの「旅人」ミュラーは辛辣な詩を歌わざるを得ないのである。

ところで、「Das Wandern ist des Müllers Lust, / Das Wandern! さすらいは水車屋職人の楽しみ、／さすらいは。」と『美しき水車小屋の娘』で歌われている職人の生活は、実際にはこの時代においてどのようなものであったかを検証することもこのチクルスを考える上で興味深い。

Ulla Jablonowskiによる『デッサウにおけるヴィルヘルム・ミュラー』(Wilhelm Müller in Dessau)²³に、デッサウにおいてミュラーが育った当時の環境の詳しい紹介がある。

話は、ミュラーが生まれた年でもある1794年に始まる。ロベスピエールの演説の翻訳者として後にデッサウを追放されることになったジャーナリストのレープマン(Georg Friedrich Rebmann)が、デッサウに滞在していたころ、ある事件を目撃した。馬に乗った赤い制服を着た男たちが、ある仕立屋職人を襲撃して殴っていた。襲撃した男たちを指揮していたのが領主とその嫡子だった。

21 WMV. Bd.1, S.117.

22 WMV. Bd.1, S.295.

23 Wilhelm Müller in Dessau, Wirtschaft und Gesellschaft der kleinen Residenzstadt um 1800, S.33ff. In: Wilhelm Müller Eine Lebensreise. Verlag Hermann Böhlau Nachfolger Weimar. 1994.

レープマンが、その後興味を持って調査したところ、その事件の発端は、1792年にまでさかのぼる。仕立屋の親方エーベリウス (Johann Carl Eberius jun.) は、錫製の燭台で刑吏の息子を殴った。彼は、不幸にも転倒して死んだ。エーベリウスは、市民としての権利は剥奪されなかったが3年の懲役刑を言い渡された。領主 (Leopold III. Friedrich Franz von Anhalt-Dessau 1740-1817) は、それを1年の刑に変更させた。その上エーベリウスは、同業者組合 (Innung) に、引き続き留まることが許され従来通り仕立屋を営む権利を持つことになった。

デッサウの職人たちは、この領主の介入ならびにその結果としての処分の軽さを不当と見なした。乱暴者として評判のエーベリウスのもとで、職人は働きたがらないし、自分の妹が領主の愛人だとエーベリウスが自慢していたことも反抗の原因だ。1794年デッサウの仕立屋親方45人は、エーベリウスのもとには、団結して職人を送らないことを決議し同盟を結んだ。

しかし、この結束は、君主に従わない職人たちが拘束され尋問されることによってこわされてしまう。そのうえ、首謀者とみなされたふたりの職人は、追放されてその日のうちに国境を越えさせられた。

ところで、同じ仕立屋親方であるミュラーの父 (Christian Heinrich Leopold Müller 1752-1820) は、この時どういう立場にいたのであろう。彼の妹 (Sabina Dorothea Elisabeth 1755-1845) がエーベリウスと結婚したことにより、エーベリウスとは義理の兄弟であったので、ミュラーの父はこの対立には関わらぬようにしていたのである。この騒ぎの際にもう一つ分かったことは、当時のミュラーの家には7人の職人がいたことだ。手工業者規則によると親方は2人までしか職人をおけなかったので明らかに違法である。また1792年にエーベリウスとミュラーの父は、秘かに44ターラーの価値の商品を、税を払うことなくライブチヒから持ちこんだことが発覚した。普通なら、罰として、商品の没収とその商品の2倍の額の罰金のはずであるが、彼らは、税の支払い (1ターラー21グロッシェン) と15ターラーの罰金で済んでいる。

1800年頃にはすでに、あらゆる分野で職人はアンハルトデッサウでも供給過剰であった。Jablonowskiによると人口8500人のデッサウにも1793年にはMeister 60人、Freimeister 1人、未亡人7人 (+ 26 Landesmeister)²⁴にのぼる仕立屋親方たちがいた。未亡人を数に入れているのは、おそらく、親方の未亡人と結婚して親方の地位を手に入れる者も珍しくないという事情からであろう。1794年には10人のMeisterに仕事がなかった。したがって、仕立屋の組合も定数の削減につとめ、仕事がひとりの親方の所に集中しないように雇える職人の数を制限した。

こうしてみると、税の不正のときの穏便なあつかいやミュラー家の制限をこえる職人の数を考えれば、ミュラーの父もエーベリウスを通じてできた領主へのコネクションを最大限利用していたことになる。ライストナー (Bernd Leistner) もミュラー作品集に載せた伝記的な前書き

24 Ebd.S.35.

で父親は自分の病気で一家が一時経済的な困窮に陥ったとき、領主に援助をたのみさえしたことを指摘している（「2度5ターラーを Leopold Friedrich Franz は彼に与えさせた。」²⁵）が、これも領主との深い関係があったからできたことであろう。

ここで、分かることを整理すると職人たちがおかれている立場は、すでに非常に悪かったことと、ミュラー家が領主との特別のつながりを享受していたことだ。

1789年のフランス革命以後、職人組合に対する監視はきびしくなった。職人組合の集会は、役人の出席のもとで行われ議事内容は役人によって記録された。これに対する役人への報酬の支払いは組合がしなければならず、親方資格の作品検査にも判事が出席した。1821年には、新しい組合（Innung）規則が定められ、マイスター試験を受けるには、領主のもとにある下級法廷により居住権が前もって認可されていなければならないことになった。これは、事実上よそからの流入者を閉め出す措置であり、親方を志す若者の《さすらい》（Wandern, Wanderschaft）ができなくなることである。前近代的な手工業者たちは、領主による監視と労働力過剰による経済的圧迫にそこまで苦しんでいたのである。

ところで、このように気楽な稼業とは言えない仕立屋を継がないことに早くから父親によって決められていたヴィルヘルムも、父親の代に獲得した領主一族とのつながりを成人してからも利用していた。統治はすでに、孫の代に変わってはいたが（Leopold Friedrich 統治 1817-71）。イタリアから帰った直後、ミュラーは食べるための職として補助教員に応募し採用される。高等学校で週に「2時間の歴史と6時間のギリシャ語」²⁶を教える傍ら、司書として官立の図書館の設立の仕事を受け持った。比較的ある時間的余裕を利用してイタリア旅行に基づく『ローマ、ローマ人たち』（Rom, Römer und Römerinnen）などの執筆に没頭した。新しい学校長（Christian Friedrich Stadelmann）が就任すると、ミュラーの授業の義務は週20時間に増えていた。新しい学校長は、ミュラーを管理下に置きたがり、ミュラーは執筆の時間が奪われるのを恐れた。長い確執の後ミュラーは、この学校長の支配から独立し、学校の業務からいっさい開放され、図書館の上級司書として自分の執筆活動に十分に時間が確保できる立場を確保することができた。学校長に味方する意見が常に多かったのにもかかわらず、学校の管理機関としての役員会（Konsistorium）は、最終決定としてミュラーに有利な判定を下した。ミュラーと領主との親密な関係を恐れてのことであろう。いかなる管理機関であれ、絶対君主が異をとらなければそれに従わないわけにはいかない時代である。

ミュラーはデッサウの議員で名家として知られているパーゼドウ（Ludwig Basedow）の娘と結婚した。もちろんパーゼドウ家としては、両家の身分の不釣り合いについての不満はあったが。国家財政が緊迫しているにもかかわらずミュラーに特別な地位を与えた領主は、1824年には彼を宮廷顧問官に任命し、1826年にミュラーが病気の際には静養のために夏の離宮に住

25 WMV.Bd.1,S.XI.

26 WMV.Bd.1.

まいさえ用意した。小さな地方国家であるから可能な領主との家族的つながりではあるが、ミュラーは、社会に対し常に不満を持ちながら、一方では社会的地位を求め領主とのコネクションを利用した。名家の娘との結婚によって一流の家に入りできる家柄を獲得し、図書館勤務の傍ら、旅行を好み、質素とは言えない生活を支えるために流行作家としての売り上げをも配慮しつつ膨大な作品を書き続けた。ミュラーには、2つの面が同居していたのだ。しかし、当時のインテリには珍しくない態度でもあったろう。一線を越えてしまえば、逮捕あるいは追放の危険がある。仕事を罷免されたインテリの生きていく場所は、軍人や忌み嫌っていた検閲官になるくらいしか可能性がないのが分かっているのだからうまく自分なりに均衡をたもって生きようとするのを全面的に責めるわけにもいくまい。

1819年に9月22日²⁷に領主に宛てて校長 (Christian Friedrich Stedermann) との確執や増やされた授業時間で著作活動に支障を来すことへの不満および図書館における給与の改善を直訴する長文の手紙を書いたかと思えば、同年12月12日には、イタリアで知り合ったスウェーデンの詩人 Per Daniel Atterbom に「しかし、ドイツの連邦の砦のなかに（そして印刷術が発明された町に）報道強制と政治的異端審問 (Inquisition) は残った。これが、ライプチヒ近郊のドイツの民衆の戦いの戦利品だ。」²⁸と不満を述べる。さらに1822年5月2日には、この詩人に、「ほんとうに、私は、私がこの国民に対して剣の一振りをもふるったことを、しばしば恥じて怒りを感じたい。彼らの議会は確かに、今や、弾圧され苦しめられた全ての人間たちの代表だ。」²⁹と検閲法に反対するフランス議会での演説を誉めながら、ベルリン時代とはうってかわって、フランス擁護の心中を打ち明けるのだ。

『美しき水車小屋の娘』が影響を受けた作品をたどる試みは、すでに数多く成されている。ミュラーの書いた他の多くの作品と同様に、ミュラーは“型の継承”を悪いこととは思わない。ゲーテ、アルニム、ブレンターノやウーラントを始めとする多くの作家から直接的かつ間接的に多くの影響を受けている。そのことが場合によっては、現代におけるミュラーの価値を下げているかもしれない。しかし、誤解を承知で言えば、モーツァルトの作品が同時代の多くの作品に似ているのと同様に現代の独創性という言葉のイメージで判断するのは、あまり意味がない。アルニムやブレンターノが『少年の魔法の角笛』に自作を紛れ込ませようとしたように、また多くの作家が自作の詩に民謡から多くの着想を得たように、ミュラーにあっては、独創性の概念ははるかに曖昧であった。それは、ともかく『美しき水車小屋の娘』が、旅、森、角笛、牧歌、恋などのいわゆるロマン派につきまとうイメージから出発していたことは、まちがいない。しかし、ゲーテの水車小屋の娘のような素朴で平和な光景ではない。

『少年の魔法の角笛』(Des Knaben Wunderhorn) 第1部に、「水車屋の職人の悪巧み」

27 WMV.Bd.5,S.142ff.

28 WMV.Bd.5,S.147f.

29 WMV.Bd.5,S.220f.

(Müllertücke) という詩がある。水車屋の職人が、3人の人殺しに自分の妻と子供を大金と引き替えに売り渡す。危ないところを偶然近くにいた妻の兄である猟師が救う。猟師は、水車屋の職人を自分の家に招待し、何食わぬ顔でやって来た水車屋の職人に「おい、水車屋、画家、人殺し、泥棒！／俺の妹を人殺しに渡したな。お前をすぐ殺してやる。」(Du Müller, du Mahler, du Mörder, du Dieb! / Du hast mir meine Schwester zu den Mördern geführt, / Gar bald sollst du mir sterben.)³⁰ とののしるという内容だ。水車小屋の職人は、当時の人々には、少々うさんくささを感じさせる職業であったようだ。職業への偏見は家族に対してもつきまとう。この環境が、自由な恋愛の場として選ばれたのは当然のことである。ゲーテのように水車小屋の娘に誠実さを残すかあるいはミュラーのようにまったく娘の「後悔」を除外してしまうかは、作者次第なのだ。

ミュラーの『美しき水車小屋の娘』は、志願兵としてナポレオンに対する解放戦争に参加した世代のメッセージである。水車小屋の若者の「誠実な心」に答えるのは水車小屋の娘の「移り気」である。オスマントルコという異教徒国家への敵意や古代ギリシャへの思い入れがあったとしてもミュラーが『ギリシャ人の歌』を書かなければならないのは自由に対する思いへの共感である。

コールホイフル (Michael Kohlhäufel) によれば、「好きな色」(Die liebe Farbe) は、ミュラーがベルリン時代に尊敬していたフケー (Friedrich de la Motte Fouqué 1777-1843) の詩「義勇兵のために戦いの歌」(Kriegslied für die freiwilligen Jäger) の影響を受けているという。「さあ、楽しい狩りに、／今やその時だ；／夜が明け始めた、／戦いはもう遠くない！」³¹ (Frisch auf, zum fröhlichen Jagen, / Es ist nun an der Zeit; / Es fängt schon an zu tagen, / Der Kampf ist nicht mehr weit!) これに対して

「好きな色」の一節は、

(…)

Wohlauf zum fröhlichen Jagen!

さあ楽しい狩りへ！

Wohlauf durch Heid' und Hagen!

さあ荒野や森を通過して！

Mein Schatz hat 's Jagen so gern.

僕の大切な人は緑が好きなんだ。

Das Wild, das ich jage, das ist der Tod,

僕が狩る獲物、それは死だ、

もちろん、フケーの詩では、狩人 (Jäger) とは、兵隊とくに義勇兵のことであり、狩りが戦

30 Die digital Bibliothek der deutschen Lyrik Zweitausendeins. 2004, S.4141.

31 Kohlhäufel, Michael: Poetisches Vaterland. Dichtung und politisches Denken im Freundeskreis Franz Schuberts. Kassel (Bärenreiter) 1999, S.316.

いにたとえられているのは言うまでもない。狩りと狩人 (Jäger) と狩りのホルンは、ドイツを外敵から守るシンボルとなった。コールホイフルによれば、義勇兵 (freiwilliger Jäger) は、もともとは主に林務官から形成された軽歩兵であり、彼らは「緑の人」(die Grünen)³² とよばれ、その緑は、同時に国家と統一の色であった。ナポレオンからの勝利を祝って公刊された『狩人の歌』(Jägerlied) のひとつに、「さあ、お前たち緑の者たちよ！ […] /ホルンを勇ましくひびかせよ！ / 人類の聖なる最高の財宝もとめて / 自由をもとめて戦おう。」³³ (Wohlauf ihr Grünen! […] / Laßt die Hörner munter erklingen! / Nach der Menschheit heiligem höchsten Gut, / Nach der Freiheit lasset uns ringen.) と書かれている。さらに1800年頃に、愛国詩人ケルナー (Theodor Körner 1791-1813) は、「さあ、お前たち狩人よ、自由に敏捷に / […] / さあ、敵を！ さあ戦いの野へ / ドイツの祖国のために」³⁴ (Frisch auf, ihr Jäger, frei und flink! / […] / Frisch auf den Feind! frisch in das Feld! / Fürs deutsche Vaterland!) と書いている。そして、このような戦いから帰った戦士 (狩人) を迎えてくれるのは、誠実なドイツ女性でなければならない。

戦いからの帰郷の光景が、ある『狩人の歌』に表現されている。「獲物はつかまった。狩は終わった。ヤッホー！ / 狩人たち彼らは、楽しい宴会にやってくる。ヤッホー！ 窓はなんと輝いているか、ワインはなんときらめいているか！ / 最愛の恋人は、彼女は部屋に合図を送る。 / ねえ、私の最愛の人よ！ / うれしいときもつらいときもあなたのものよ。」³⁵ (Das Wild ist gefangen, die Jagd ist aus, Juchhe! / Die Jäger sie kommen zum fröhlichen Schmaus, Juchhe! / Wie flimmern die Fenster, wie blinkt der Wein! / Die Liebste sie winkt zum Kämmerlein: / Komm, Herzgeliebter mein! / In Freuden und Leiden nun dein.)

『美しき水車小屋の娘』においてミュラーは、このトポスをひきつぎつつ、モチーフの結びつきを、倒錯させてしまう。コールホイフルは「嫉妬と誇り」(Eifersucht und Stolz) における「狩猟から獵師が楽しそうに家に帰る時、 / 慎み深い子は窓から外へ頭を突き出したりはしない。」³⁶ (Wenn von dem Fang der Jäger lustig zieht nach Haus, / Da steckt kein sittsam Kind den Kopf zum Fenster raus.) の対韻を引用する。緑の狩人の出現が恋人に誠実ではなく気まぐれをもたらす。国家ロマン主義の神聖さを代表する森の色つまり本来「好きな色」(die liebe Farbe) であるはずの緑は、「悪い色」(die böse Farbe) になる。ドイツの誠実さと解放の色は、不実な愛によって悪い色にゆがめられる。自由を約束する緑の服を着た狩人が、奪う者になる。政治的幻滅が愛の幻滅に置き換えられる。

32 Ebd. S.316.

33 Ebd. S.316. Vaterländische gesellige Lieder. Hamburg 1815. フランスからの解放に際して発刊された。匿名のものも多くすでに1811年に没しているHeinrich von Kleistの作品Die wilde Jagdも掲載されている。義勇兵が狩人として表現されている。様々な『狩人の歌』がこの戦争の勝利を表現している。引用はMichael Kohlhäufelによる。

34 Die digital Bibliothek der deutschen Lyrik Zweitausendeins. 2004, S.44122.

35 Ebd. S.317.

36 WMV. Bd.1, S.56.

もう一度『美しき水車小屋の娘』のプロローグをこの観点から考えてみると、次の3行だけでも、次のように

(…)

Mit edler deutscher Roheit aufgeputzt,	「高貴なドイツの粗野さ」で飾られ、
Keck wie ein Bursch im Stadtsoldatenstrauß,	「都市兵の戦い」の若者のような威勢の良さがあり、
Dazu wohl auch ein wenig fromm fürs Haus:	それに加え、「ほんの少し」この家のために「敬虔さ」もあります。 ³⁷

(…)

(「 」は筆者)

等いたるところにドイツの理想や戦いに関連した皮肉な表現を見つけることができる。さらに、「(…) ちょうど冬の時期ですから、」³⁸ (... weil es grad ist Winterzeit,) と唐突に今が「冬」であることが、一方的に宣言される。実は、このチクルスの標題にもすでに『美しき水車小屋の娘』冬に読むこと³⁹ (Die schöne Müllerin [Im Winter zu lesen]) とご丁寧にも念がおされているのだ。自由が閉ざされた時代を暗示するためにミュラーが様々な詩で「冬」の表現を使うやり方の通りである。そしてこの歌のなかにだけある春を半分だけ開けた窓から皆にのぞくことをすすめるのだ。

Auch ist dafür die Szene reich geziert,	そのかわりシーンは豊かに飾られています、
Mit grünem Sammet unten tapeziert,	下に緑のビロードで壁紙が貼られています、
Der ist mit tausend Blumen bunt gestickt, ⁴⁰	そのビロードは何千もの花で色鮮やかに刺繍されています、

そしてその背景の緑は壁紙で花は刺繍で作られた人工の作り物だとその「春」も見せかけであることを伝える。

Drum denkt, wenn euch zu rauh manch Liedchen kling,

だから、もしいくつかの歌が粗雑過ぎるとみなさまに聞こえるなら、

37 WMV.Bd.1,S.41.

38 WMV.Bd.1,S.41.

39 WMV.Bd.1,S.41.

40 WMV.Bd.1,S.42.

Daß das Lokal es also mit sich bringt.

「飲み屋」にはそれがつきものであると考えてください。

当時「飲み屋」は、集会被禁された者たちが、合法的に集まり、憂さを晴らすことができる場所であったが、まるでこの『美しき水車小屋の娘』の話がそこで交換される会話や歌であるかのような表現である。「飲み屋」では、普段できないようなこの時代への文句を酒と歌を隠れ蓑におこなっていたのだ。

プロローグの後に続く「さすらい」(Wanderschaft)は、気楽な民謡の歌詞にもなってシューベルトの歌曲(Das Wandern)以上に多くのドイツ人たちに親しまれている。ミュラーには、「さすらい」をモチーフにした詩が数多く存在する。ロマン派に多く見られる古きドイツの郷愁をさそい皮肉の味付けをされていないものも多い。この「さすらい」の詩も独立させれば十分にそのような詩として鑑賞できる。しかし皮肉な調子のプロローグの直後では、「ああ、さすらい、さすらい、僕の楽しみ、／ああ、さすらいよ。」⁴¹(O Wandern, Wandern, meine Lust, / O Wandern!)の表現も嘘に見えてくる。「さすらい」は、手工業者労働力は過剰で社会での行き場がなくなっているこの時代には、理想の親方をもとめての旅などのたれ死ぬか乞食にでもなる可能性が既に大きかった。

ミュラーは、ベルリン時代に国粋主義者でドイツ体操の父といわれるヤーン(Friedrich Ludwig Jahn 1778-1852)と親交を結び彼を尊敬していた。したがってミュラーは、ヤーンのいっていたロマン主義から完全に脱却した〈さすらい〉(Wandern)の概念にも親しんでいた。ヤーンはナポレオンをはじめとする外敵からドイツを守る体力と精神力を若者に身に付けさせる手段として体操を奨励したが、カールスバートの決議の後には、体操教育によって青年を組織、扇動し秩序を脅かす反政府分子として逮捕され禁固刑をうけ公職から追放された。ヤーンにとってWandernもしくはWanderschaftも体操と同様に身体を鍛え、外敵もしくは場合によっては内部の敵と戦う力を養う実用的な価値をあたえられていた。1820年にヤーンの逮捕追放とともにプロイセンをはじめ各地で出された体操禁止令、1837年にギムナジウムにおける体操教育禁止令が解除されるまで続いた。ミュラーはこのように多様な「さすらい」の概念に親しんでいたことになる。

詩の中で、水車小屋の若者は、小川と共に擬似的なユートピア空間を作ろうとしている。ミュラーがプロローグで言うように登場人物は水車小屋の若者だけで、小川は若者の心を代弁しているように見える。次の詩「どこへ」(Wohin)で、若者は小川に行くべき道を聞き、「小川に寄せる感謝のことば」(Danksagung an den Bach)で、誠実でまるでこの世のすべての苦しみに救済してくれるであろうと、一方的にこの若者が信じ込んでいる娘の所に導いてくれた小

41 WMVBd.1, S.42.

川に感謝する。「僕は知りたい」(Der Neugierde)では、娘が愛してくれているかを小川に尋ねさえする。ミュラー自身も居心地を楽しむようにひきのばされたユートピアだが、緑の服を着た男と水車小屋の娘との仲を知るや、若者は、この小さな仮想されたユートピア世界をこわそうとする。たとえば、「最初の苦しみ、最後の戯れ」(Erster Schmerz, letzter Scherz シューベルトは作曲せず)において、橋の破壊が夢想される。

(…)

Und wenn der stolze Jäger
Ein Blättchen mir zertritt,

Dann stürz, o Steg, zusammen
Und nimm den Grünen mit!

(…)

高慢な狩人が
(僕が橋の上に蒔いた薔薇の) 葉っぱを踏み
つけるなら、
橋よ、崩れ落ちろ
そして緑の服を着た男を共に連れ去れ!

あるいは、ユートピアの夢を破壊する緑の服を着た狩人をこの囲われた世界から連れ去ってくれと小川にたのむことによって、この仮想されたユートピアをなんとか守ろうとする。

Und trag ihn auf dem Rücken
Ins Meer, mit gutem Wind,
Nach einer fernen Insel,
Wo keine Mädchen sind.⁴²

(…)

彼を背中に乗せて
海へ連れ去れ、良き風と共に、
遠い島へ、
そこに少女たちはいない。

だがこの試みが無駄であるのを知るやまるで聞き分けのない子供のように、「僕は、緑の葉っぱを全部／すべての枝から引き抜きたい。」⁴³ (ich möchte die grünen Blätter all / Pflücken von jedem Zweig,) と再び破壊の願望が高まる。夢見たユートピアが全部うそだと分かったら壊すしかない。「僕らの愛は常緑だから、」⁴⁴ (Weil unsre Lieb ist immergrün,) とうたわれた誠実のドイツの象徴の緑も不実の象徴になり、青い〈忘れな草〉が黒い「忘れ草」(シューベルト作曲せず)に変えられる。ミュラーも、自ら〈義勇兵〉(freiwilliger Jäger)として戦場にたち理想的な国家の成立を一時的にでも夢に見て裏切られた若者たちの一人であるが、ここでは〈狩人〉(Jäger)までもが憎悪の対象になってしまう。「水車屋職人と小川」(Der Müller und der Bach)では

42 WMVBd.1, S.57.

43 WMVBd.1, S.58.

44 WMVBd.1, S.54.

Und wenn sich die Liebe
Dem Schmerz entringt,
Ein Sternlein, ein neues,
Am Himmel erblinkt. //

愛が
苦悩からのがれ、
星が、新しい星が、
空で輝くと。

Da springen drei Rosen,
Halb rot, halb weiß,
Die welken nicht wieder,
Aus Dornenreis.⁴⁵

半分赤く、半分白い
3本の薔薇が
棘の小枝から咲き出て、
2度と枯れることはありません。

と失望した水車屋職人を職人の分身であることをやめ、独立した意志の主体となった小川が慰める。苦悩から解放され新しい星が空で輝くと咲く2度と枯れることのない〈半分赤く、半分白い〉薔薇とは何であろうか。〈忘れな草〉の青と薔薇の赤と白。自由（青）と博愛（赤）と平等（白）。フランス革命の象徴の色と考えるのは無謀だろうか。失われることのないユートピア的世界を小川だけが期待させてくれるのである。過去も未来も信用できないときに、おそらく水車小屋の存在に関係なく、人間社会の矛盾に満ちた営みを超越して、この場所で人が住んでいない昔から流れ続けていたであろうし、これからも流れ続けるにちがいない小川だけがわずかなよりどころとして残るのである。

ミュラーの行動は過激なものではない。同時代の多くのインテリと同様、せいぜいのところ限られた範囲で不満を言うしかないのだ。現体制には不満を持ちつつもときには領主との結びつきを利用し、できるだけ快適に生きたいという調子のよさも身に付けている。無神論を表明したかと思えば、熱心なキリスト教信者になる。熱烈なドイツ国粋主義者からフランス、イタリアへの精神的な愛着を示す。相反するものが短い生涯を通して共存し続けるのである。すべてのものを完全に信用しないかわりに、すべてのものに手を出す。どちらが本当の自分なのかさえ分からなくなる。皮肉な目で作品に距離をおいたかと思えばドイツロマン派の叙情詩のすぐれた詩人としての素質が顔を出す。ときには器としての形式と内容が矛盾することも、形式が一人歩きして磨きがかかりすぐれた叙情詩になることもある。シューベルトの作曲によりこのチクルスの一つの面が強調されたことにより、これらの詩が不朽の価値を得たことは事実であるが、ミュラーの詩の持つ本来の屈折した意味が忘れ去られてしまったことも否定できない。しかし、ヴィルヘルム・ミュラーが置かれていた当時の状況を前提とすることによって、もうひとつの顔が浮かび上がってくるのである。

(本学講師＝ドイツ語担当)

45 WMV.Bd.1, S.62.